無限のスキルゲッター!
mugen no skill getter
3
∞毎月レアスキルと大量経験値を
貰っている僕は、異次元の強さで無双する∞
maruzushi
まるずし
illustration
中西達哉

登場人物紹介

メタトロン
ユーリによって
召喚された巨神。
強靭だし
無敵だし最強。

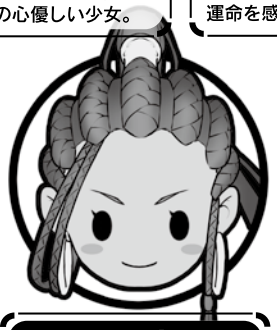
ルク
伝説の幻獣
『キャスパルク』。
モフモフで
可愛らしい見た目
だけど超強い。

個性豊かなヒロイン達

リノ
ユーリの幼馴染み。
妙に感覚が鋭いことを除けば、
普通の心優しい少女。

メジェール
伝説の称号『勇者』を持つ少女。
ユーリにただならぬ力と
運命を感じ、行動を共にする。

フィーリア
ユーリの住むエーアスト国の
王女様。なぜかユーリを
慕っている……病的なまでに。



ソロル
凛々しいアマゾネスの女戦士。
ユーリの強さに惚れ込んで
仲間となる。

フラウ
どこか抜けている
エルフの冒険者。テンションが
上がるとすぐ気絶してしまう。

マグナ
最強の冒険者
『ナンバーズ』の一員。
実は彼氏いない歴
＝年齢……？

ユーリ
神様の娘を救った
お礼に毎月倍々の
経験値を貰えるように
なった本作の主人公。
無限の経験値とスキルで
のんびり最強を目指す。

シェナ
マグナの妹で、
地上最強の退魔師。
姉同様（？）恋愛に
関しては奥手な
タイプ。

第一章　愚王の国

1．無法者たち

僕、ユーリ・ヒロナダは、女神様を助けたことによって、大きな恩恵を授かった。
毎月とてつもない経験値と、非常にレアなスキルをもらえるようになったのだ。
そのおかげで人生順風満帆に過ごせるかと思っていたところ、なんと魔王軍の罠にハマってしまい、幼馴染みのリノ、フィーリア王女と共に、故郷のエーアスト国を追われることになる。
絶望的な状況の中、豊富な経験値と強力なスキルに助けられ、僕らはなんとか活路を見いだす。
アマゾネスのソロルやエルフのフラウがパーティーに加わり、離ればなれになっていた勇者メジェールとも合流。
そして伝説の幻獣である『キャスパルク』のルクと、地上最強のドラゴン『熾光魔竜』も仲間となった。
頼もしい味方がどんどん増え、反撃の準備は着々と整いつつある。
エーアスト奪還まであともう少しの辛抱だ。

僕は心に闘志を燃やしながら、ドラゴン退治のために訪れていたヴィルカーム山脈をあとにした。
ここまで来るのに巨大ゴーレムを使ったけど、帰りはゼインの背に乗って移動している。
来るときには丸三日以上かかったが、ゼインはなんと一時間ちょっとでその距離を飛行した。
これ、ゼインがその気だったら、あっという間に世界は火の海だったなあ。
まあゼインは別に世界を滅ぼす気なんかないらしいし、大昔に暴れたというのも、人間のほうから仕掛けてきたので、その報復をしただけとか。
ゼインは地中で永らく眠っていたけど、ふと不穏な予兆を感じ取り久しぶりに起きてうろついていたら、ドラゴン退治の現場に遭遇したということだ。
一応、同族であるドラゴンを助けたかったらしい。
改めて、ドラゴンたちを殺して悪いことをしちゃったな。テイムした子も、すぐに僕たちのために犠牲になっちゃったし……
でもそのおかげで、討伐メンバーは無事全員生き残ることができた。亡くなったドラゴンたちの分まで、ゼインを大事にしてあげようと思う。
なお、僕が倒したドラゴン五頭分の経験値は、その場にいた討伐メンバー十一人全員に分配された。結果として一人頭２３０万ほどを獲得。
これでリノたちもさらに強化ができそうだ。
留守番しているメジェールも喜んでくれるだろう。

……と、僕たちがヴィルカーム山脈から数日ぶりに帰ってみると、なんと予想外のことが発生していた！
「何よアレ⁉　何が起こってるの？」
「なんだいったいアイツらは……？」
ゼインの背から地上の様子を見て、リノとソロルが叫んだ。
住処を百名ほどの兵士が取り囲んでいたのだ。
兵士たちの前には、メジェールとストーンゴーレムの姿もある。
僕の不可視結界に惑わされず、準備万全でここへ来ているというのは、つまり住処の場所をあらかじめ知っていたってことだ。
ひょっとして、魔王討伐隊が僕を始末しにやってきたのか⁉
アマトーレ国はここら一帯を恐れていたし、危険を冒してまでわざわざ来ないものとタカをくくっていたけど、少し認識が甘かったかもしれない。
とりあえず上空からでは詳細が分からない。すぐに助けに行かないと！
「リノたちはこのままゼインの上で待ってて！」
「了解よ！　気を付けてね」
僕はゼインの背から飛び降りた。

◇◇◇

「だから魔王なんていないって言ってるでしょ！」
「ウソをつくな！　やましいことがないなら、その巨大な建物をオレたちに調べさせてみろ！」
「そうだ、ぐひひっ、いったい何を隠してるのかなあ？」
「何も隠してなんか……」

ヒュウウゥゥンンン……ズドーーーン!!

「な、なんだっ!?　何か落ちてきたぞ？」
僕は一刻も早く助けに向かうため、スキルレベル10の『飛翔（フライ）』を全力で使って下降し、地面に激突する勢いで着地した。
「何よいきなり……って、ユーリじゃないの!?　なんで空から降ってきたの？」
メジェールが降りてきた僕を見て、驚きの声を上げた。
「ただいまメジェール。遅くなってゴメンよ、大丈夫だった？　この人たちはどうしたの？」
「ああ、なんか知らないけど、住処の中を見せろってしつこくて……詰め寄られてただけだから全

然平気だけど、そろそろ我慢の限界で、こいつら全員叩き帰そうと思ってたところよ」
メジェールが暴れる前に間に合って良かった。
メジェールがこんなヤツらに負けるはずないけど、まあ手加減を知らない子だからな。
それこそ、収拾のつかない事態になっていたかもしれない。
「なんだ貴様は!?」
「僕はここの主（あるじ）ですが、何か用ですか？」
「あるじだとぉ？　お前のようなガキが？」
メジェールに詰め寄っていた兵士が、僕を見て怪訝（けげん）な顔をした。
あれ、僕が魔王だという噂を知って討伐しに来たんじゃないのか？
そういや、魔王の情報は一般国民には知られてないってシャルフ王が言っていたけど、この兵士たちも知らないで来たのかな？
その兵士が続けて話す。
「ここに山賊のお宝があることは分かってんだぜ。それに女たちもいるんじゃないのか？　痛い目に遭いたくなかったら、さっさとオレたちを中に入れろ！」
「……どこでその情報を？」
「王から直々の命令を受けたんだ。何者かが魔王のフリしてこのアジトを占拠してるから、宝と女を奪ってこいとな」

王様から直接？
フリーデンのシャルフ王がそんなこと命令するわけないし、アマトーレか？
しかし、あのアマトーレがこんな強引な策に出るなんて、少し違和感がある。
ひょっとして……？
「あなたたちはどこの国の方ですか？」
「ああん？　ゼルドナに決まってるだろ！」
やはり！　ゼルドナだった！
ゼルドナは、この住処の周りにある国のうちの一国だ。
他国は比較的平和主義として知られている中、ゼルドナは非常に好戦的で、周辺国との問題が絶えない。
武力衝突することも少なくないほどだ。
そしてゼルドナ王の独裁国家でもある。
王様は国民から莫大な税を徴収したり、生産物を強引に取り上げたりとやりたい放題で私腹を肥やして、日々贅沢三昧しているという噂だ。
僕らがアマトーレから逃げたとき、ゼルドナには行きたくなかった理由がコレだ。
「どうしてこの場所が分かったんですか？　そう簡単には見つからないはずなのに」
「へへっ、オレたちの王がここらの情報を全て知っていたのさ。お宝と女たちが結界の中に隠れて

いるって」
なるほど……
これは推測だが、『剣聖』イザヤたちが僕らの情報を流し、それを知ったゼルドナ王が、山賊の宝や被害女性の存在に思い当たったんだろう。
魔王の噂については、きっと半信半疑なはずだ。信じていたら、兵士をここに送るなんてことはしないだろうからな。
とりあえず、様子を探りに来たってところか。
あわよくば、そのまま財宝を奪い取ろうという魂胆だったに違いない。
ここのだいたいの場所が分かれば、僕の不可視結界があっても侵入は可能だ。
「おら、そこをどきやがれ！　邪魔するとぶっ殺すぞ！」
怒鳴りつけてくる兵士に、僕は冷静に話しかける。
「魔王のフリではなく、本当に魔王がいるとは思わなかったんですか？」
「なぁにが魔王だ？　ヒャハハ、そんなヤツ、このオレたちが退治してやるぜ」
「お宝と女はオレたちがもらっていく」
「確認しますが、皆さん全員が同じ意見ですか？　もし無理矢理命令に従っている人は、ここから去ってください」
「ばーか言ってんじゃねえ！　オレたちを誰だと思ってんだ！」

「泣く子も黙るゼルドナ強奪隊だぞ。オレたちが各地で金や女を奪って王に献上してるんだ」
「フヒヒヒ、どんな女がいるのかなあ？　王に差し出す前にオレたちが味見してやる」
その言葉を合図に、その場の兵士たちが下品な笑い声を上げた。
「まるで山賊ですね」
「けっ、あんなヤツらと一緒にするんじゃねえぜ。オレたちは王の許可のもとにやってるんだ。何もやましいことはねえっ」
「では、魔王に逆らったことを後悔しませんね？」
「ああ？　魔王なんて少しも怖くねえ。今すぐその魔王ってヤツをここに呼んでこい！」

「僕がその魔王だ！」

僕はイザヤたちを脅した『界域魔法』――『四死神酷虐葬送』を撃ち放つ。
直後、兵士たちの周りに巨大な四人の死神王が浮上し、彼らを結界内に封じ込めた。
「お前たちの命、全て死神王に捧げよう。あの世で悔いるがいい」
「こっ、はっ、ひいいいいいっ……!?」
「な、な、なんだコレはっ!?」
「し、死神王だとっ？　ばかな、そんなばかなあああっ」

兵士たちは、あまりの恐怖状態に失禁する。それどころか、泡を吹いて完全に気絶した者もいた。
充分脅かしたところで、死の攻撃が発動する前に魔法をキャンセルする。
そして死神王たちは地面へと還っていった……
「お前たちはこの魔王の怒りに触れた。次にここへ来たら、ゼルドナを滅ぼすぞ。いいか、分かったらそれを王に伝えろ」
「ひょわっ、わきゃりまひたっ、に、二度ときまひぇんっ」
……というやりとりのあと、何故か兵士たちが誰も逃げない。
なんだ？　まだ何か用があるのか？
「どうした、逃げないのか？　なら本当に殺すけど？」
「ま、待て、待ってふれ、こ、こ、こひが抜けて一歩も動けんのだ……」
ありゃ、そうでしたか。
でもそのままここにいられても邪魔だな。
「分かった、なら逃げる必要がないように殺してやろう」
「い、行く、行きます、今すぐに去りますううっ」
もう一度脅したら、みんな四つん這いでヨタヨタと逃げていった。
これだけやれば、もう二度と来ないだろう。
ただ、完全に場所がバレちゃったし、今後のことを少し検討しないとな。

◇◇◇

「ぬぁっ、なんなのよこの怪物はあああぁぁっ!?」
上空から降りてきたゼインを見て、メジェールが絶叫した。
「ヴィルカーム山脈で仲間にしたんだ。彼は伝説のドラゴンなんだよ」
「そ、そりゃそうでしょうよ、こんな巨大なドラゴン見たこともないわよ」
あの強気なメジェールが、ゼインを見て珍しく慌てている。
さすがに驚いたようだ。
「エンペラードラゴンだよ。その中でも史上最強と言われてる『熾光魔竜(レッドエンペラー)』さ」
「レッドエンペラー!? って、おとぎ話の？」
「知ってるの？」
僕は『熾光魔竜(レッドエンペラー)』ゼインの伝説を知らなかったけど、メジェールは知っているみたいだ。
「子供の頃に聞かされたわよ。普通より百倍も大きい真っ赤なドラゴンがいて、悪い子にしてると世界を滅ぼしちゃうって」
百倍って……ゼインはそこまで大きくないけど、まあおとぎ話だから誇張されているんだろうな。
実際、エンペラードラゴン自体がすでに絶滅したと思われているレベルだし、ましてやゼインの

ことは、遙(はる)か昔すぎて存在すら疑われていたくらいだ。
「ほほう、そこの少女は我(われ)のことを知っておるようではないか。なかなか感心な少女だ」
「わわっ、ド、ドラゴンが喋(しゃべ)った!? どどどどういうこと!?」
ゼインの念話を受けて、あたふたするメジェール。
「テレパシーだよ。クラスメイトにも使えるヤツがいただろ？ ゼイン、このメジェールは今の勇者なんだよ。ちなみに、お前が思ってるほどイイ子じゃないぞ」
「ふむ……なるほど。あるじ殿ほどではないが、強い力を感じるな」
ゼインはメジェールの潜在能力を感じ取ったようだ。
まあメジェールが真に覚醒すれば、ゼインよりも強くなるからね。
「ユーリってば、こんな凄いの仲間にしちゃったの？ もう敵なしじゃん！」
「いや、そうでもないよ。魔王のほうが強いし、それにゼインより強いドラゴンが魔王の部下にいるってさ」
「口惜(くや)しいがな。確かに我よりもヤツらは強い」
「なぁんだ、こんなにデカイのに意外と見かけ倒しなのね」
外見からゼインを過大評価しすぎたようで、メジェールは落胆したように毒づく。
相変わらず口が悪いなあ……悪気はないんだろうけど。
「あるじ殿、なんだこの少女は！ この我を見かけ倒しなどと……！」

「だから思ってるほどイイ子じゃないって言っただろ」
「失礼ね。正直に言っただけじゃない」
「ぬおおおお、ならば我の力を見せて……」
ゼインは少々自尊心を傷付けられたみたいで、大きく翼を広げたあと、空に向かってゴオオと咆哮を上げた。
どうやら凄いところを見せてやりたいらしい。
伝説の竜のクセして意外と可愛いとこがあるな。
「ゼイン、力を見せるのはまた今度にしてくれ。メジェール、僕はこのゼインを連れてエーアスト奪還に行こうと思ってるんだけど、どう思う？」
このあとの計画について、メジェールの意見を聞いてみる。
「いいんじゃない？　多分勝てるわよ。アタシもいるしね」
メジェールの返答を皮切りに、みんなも威勢よく言葉を続ける。
「わたくしたちもいますわ」
「オレに任せろって！」
「ご主人様にワタシの活躍をお見せシマスよ！」
「そうね、全員で戦おう！」
フィーリア、ソロル、フラウ、リノ……みんなの感情が一気に燃え上がる。

だけど、彼女たちを危険に晒すわけにはいかない。
「いや、みんなにはここで留守番していてほしい。エーアスト侵攻は僕一人でやるつもりだ」
「待ってよ、あそこにはクラスメイトたちもいるわよ？　アタシほどじゃないにしても、彼らもパワーアップしてると思うし、謎の力もあるんでしょ？」
……確かに、メジェールの言う通りかもしれない。
さすがにメジェールほどではないが、クラスメイトたちもおかしな強さを持っていた。
もし洗脳による成長力が僕の想定以上なら、意外な苦戦も考えられる。
場合によっては手加減できず、クラスメイトたちを皆殺しにしなくちゃならない展開も……
極悪非道な山賊ならいくらでも殺せる。
しかし、操られているクラスメイトを、僕は容赦なく手にかけられるだろうか？
それに、イザヤたちの動向も気になる。
もし彼らも洗脳でパワーアップしていたら、前回のように簡単には勝てないかもしれない。
ヴァクラースたちの力も未知数だし、セクエストロ枢機卿の正体が、あのゼインよりも強いという『始祖の竜』という可能性もある。
その場合は、恐らく一筋縄ではいかないだろう。
まさか『異界無限黒洞』を使って大勢の国民を巻き込むわけにもいかないし……
う～ん……僕一人ではさすがに手に余るのかなあ。

なんとか巻き添えを出さずに、上手いことヴァクラースたちだけ倒せないものだろうか。
ゼインが仲間になったとはいえ、ちょっと短絡すぎたかもしれない。
頭を少し冷やして、もう少し作戦を練ることにしよう。
「とりあえず、みんなが無事帰ってきたお祝いをしましょ。何があったのか、そのときに聞かせてもらうわ」
メジェールの提案で、その夜は全員でパーティーをすることに。
メジェールと一緒に留守番をしてた女性たちが、腕によりをかけて料理を作ってくれる。それをワイワイ食べながら、今回経験した色々な出来事をみんなに話す。
大変なドラゴン退治の旅だったけど、楽しい時間を過ごせて疲れが一気に吹っ飛んだ僕らだった。

◇◇◇

戦略についていい策も見つからないまま、数日が過ぎてしまった。
余計な被害者を出さずに国を奪還するっていうのも、なかなか難しいものだなあ。
メジェールたちも何かの度に集まっては、色々と作戦を検討してくれてるようだ。
ただ、何やら和気あいあいとした雰囲気で盛り上がってるから、ちゃんと真面目に考えてるのかは微妙だけど。

ちなみに、ゼインはそれほど食事を必要としないようで、大型草食獣キングボアーを一頭与えれば数日は大丈夫だった。
あれほどの巨体だから、さぞやたくさん食べるのかと思ったけど、大気中にある魔素を吸収すれば体調は維持できるらしい。
ほかの竜族も、その体格に比べると驚くほど少食なのだとか。
なんにせよ、大食いじゃなくて助かったよ。
そして本日も普段通りみんなでレベリングに出掛けていると、留守番をしていたメジェールから『魔導通信機』で連絡が入った。
『魔導通信機』は『魔道具作製』スキルレベル10で作ったモノで、このアイテムを所持する者同士で連絡が取れるという、大変便利な魔道具だ。
「どうしたのメジェール、何かあったのかい？」
「それがね、またアイツらが来たのよ！」
「なんだって⁉」
メジェールからの報告を聞いて、急いで住処まで戻ってきてみれば、なんとまたしてもゼルドナの兵士たちが取り囲んでいた！
いったいどういうことだ⁉　先日あれほど脅したのに！
以前同様の状況に、メジェールは怒りで爆発寸前といった様相だ。

まずい、メジェールが暴れる前に、なんとか収めないと！
僕たちは慌てて騒動の元に駆け寄る。
「今度はいったいなんの用ですか？」
「おお、来た来た、お前が噂の魔王なんだって？　まったく馬鹿げた話だぜ」
この態度からして、新しくやってきたのは先日とは別の兵士であるようだ。
「この前の兵士たちに僕らのことを伝えるようにお願いしたんですが、何も聞いてないんですか？」
「あ～本物の魔王がいたって泣き叫んでたぜ。笑っちまったよ」
「まったくだ、こんなガキ相手に逃げ帰ってきたとはな」
「それを信じなかったんですね？」
「当たり前だ。オレたちをあんな役立たずな強奪隊と一緒にするなよ。怖いモノなんかねえんだ」
「ヤツらは汚れ仕事を任されていただけのクズだ。だが我らは違う。誉れ高いゼルドナ第一騎士団だからな」
なるほど……わざわざ魔王と偽ってまで脅したのに、全然伝わってなかったってことか。
いや、伝えたのに信じてないのか。どうしようもないヤツらだな。
「一応確認しますが、素直に帰る気はありませんか？」
「バカ言ってんじゃねえ！　早いとこ女と宝を出しやがれ！　さもないと、お前らただじゃおかねえぞ」

「後ろにいるお嬢ちゃんたちも可愛いじゃねえか、全員オレたちがもらってやるぜ」
「そうですか……忠告はまるで意味がないようですね。なら、魔王の力を思い知れ！」
僕は『竜笛』を吹いた。
コレは『魔道具作製』スキルで作った魔道具だけど、そんなに大したものじゃない。
竜族のみに聞こえる音を発するだけのアイテムだ。
だが、コレを聞いたゼインがすぐさま飛んできた。
ゼインは普段、近くの山で休んでいて、『竜笛』で呼ぶと駆けつけることになっている。
最初は小さかった影がみるみるうちに大きくなり、ゼインが空から地上へと舞い降りた。
「おがあああっ……な、なんだこの巨大なドラゴンはっ⁉」
「でかい……デカすぎるぞ！」
「こ、こ、こんなヤツ、見たことねえっ」
ゼルドナ第一騎士団と名乗った男たちは、目の前のゼインを見上げて真っ青な顔になる。
あまりの恐怖に、その場から逃げることすらできないようだ。
「あるじ殿、何か用か？」
「彼らは怖いもの知らずなんだってさ。ゼイン、ちょっと脅かしてやれ」
「承知した」

僕の命令を受けて、ゼインが『輝炎息吹』を地平線目掛けて吐く。
それは二百メートル以上先まで軽々届き、その余波が男たちの頬を熱く撫でた。
「ひっ……ひぎっ……」
「魔王の力を知ったか？　次は皆殺しにする。今すぐ立ち去れ！　そしてお前たちの王に告げろ。魔王がお前を許さないとな」
「ひゃいっ、お、おつたえひまひゅうぅ～」
またしても腰が抜けた兵士――いや、騎士団だったか。
彼らはもがくように必死に後退し、待機させていた馬にしがみつき、ほうほうの体で逃げ去った。
ゼルドナか……懲りない国だ。
まさか、このあともまた来るなんてことは……
怒りと勢いに任せたこともあり、つい自分は魔王だって言っちゃったから、次は本気で討伐しに来ることも考えられる。
うーん、今さらだけど我ながら失言だったか。
しかし、ああでも言わないと、前回も今回も引き下がってくれそうもなかったし。
ひょっとすると面倒なことになっちゃうかもなあ……
「ねえユーリ、戦略についてイイこと思いついちゃった！」
メジェールが最高の作戦を思いついたというような晴れ晴れした顔で、僕に策の提案をしてきた。

こんな上機嫌になるくらいだから、余程いい案を思いついたに違いない。
僕はメジェールの次の言葉を待つ。
「ゼルドナを攻め取っちゃおうよ！」
なぁぬ～っ⁉
メジェールはいったい何を言ってるんだ⁉
「なるほど、それは名案ですわ！」
「いいねえ。そういう考えアマゾネスは大好きだぜ！」
「ユーリ、それ以外ないよ！」
「ソウデスご主人様、援護は任せてクダサイ！　ワタシの弓が火を噴きマスよー！」
僕が驚愕する一方で、なんかみんなはノリノリだ。
名案を思いついたというメジェールの作戦を聞いてみれば、なんとゼルドナを奪うということだった。
しかし、エーアストじゃなくて何故ゼルドナ？
どうせ攻めるなら、エーアストのほうがいいんじゃないの？
「いい、ユーリ？　現状では、エーアストを攻めるには手が足らない。やっぱり数は力よ。こっち

も軍を持つことによって、相手の動きを制限できる」
「そうかな？」
「そりゃそうよ！　ユーリ一人で攻め込んだら、相手の好き勝手にさせちゃうでしょ。でも大軍で行けば、クラスメイトたちだってそう簡単には自由に動けない」
「一理あるけど……軍を使って攻めこむと、兵士たちにも大きな被害が出ちゃうんじゃ？」
「兵士たちは連れていくだけで戦わなくていいの！　相手の行動を抑制させるためのハッタリよ。戦うのはアタシたちだけ」
なるほど。実際に戦わせるのはともかくとして、こっちもそれなりに戦力を率いれば、抑止力になるということか。
兵士が多ければ多いほどハッタリも利く。そうすれば、こっちの行動にも自由が生まれる。
上手く牽制できれば、無駄な被害を減らせるというわけだ。
いや、でも……
「僕たちがゼルドナに攻め入ったら、世界が混乱しないかな」
「そりゃするでしょ。でも考えてみて。預言によれば、これから世界の各地に魔が降臨するんでしょ？　魔が一つ降臨する度にそこへ対応しに行ったら、後手後手になるわよ？　だけどアタシたちが国を管理していれば、すぐに対策が取れる。そう考えると、可能な限りユーリは多くの国を支配下に置くべきだわ」

「そうか……確かにその通りだ」
ヴァクラースたちだけじゃなく、預言では今後次々と魔が現れる。
その度に現地と交渉しては、対策が遅くなる一方だ。回りくどいことをしていたんじゃ、とても間に合わない。
ましてや、万が一にもどこかの国が魔王軍に攻め落とされたら、最悪の事態となりえる。
言い方は悪いが、先に僕が支配していたほうが安全だろう。
今回のゼルドナも、いちいち返り討ちにしても状況が改善しない。むしろ、このままではどんどん悪化していく気がする。
いっそ奪ってしまったほうが、一石二鳥にも三鳥にもなる……ってことか。
それと、これは現ゼルドナ王の罪ではないけど、数十年前に『生命譲渡』のスキルが出現したとき、それを利用したのが前ゼルドナ王――現国王の父なんだよね。
他人の命を利用することに全世界から非難を浴びたらしいんだけど、前国王も独裁者だったため、強引に『生命譲渡』を私的利用した。
『生命譲渡』の保持者はずっと幽閉されたまま生かされ続け、そしてスキルを使わされて死んだ。
そのとき生き返ったのが、当時子供だった現国王なのだ。
一度死んで命を拾ったからか、現国王はわがままで無茶ばかりするようになった。
僕も一度死んで生き返っただけに、死生観が大きく変わる気持ちは分からないでもない。

とにかく、独裁者として暴虐非道な行動を繰り返し、今や完全に恐怖政治の象徴となっている。
そういうこともあって、ゼルドナを奪うことにそれほど嫌悪感は湧いてこない。
僕の考えを読み取ったのか、メジェールはクスッと笑った。
「ユーリの頭もだいぶ柔らかくなったわね。以前なら、こんな強引な策は絶対却下だったでしょ。『眷女』のみんなに感化されちゃったのかもね」
「そうだね。リノやフィーリアたちの無茶にはずいぶん付き合わされたから」
僕の言葉にリノが頬を膨らませた。
「あら心外ね、私たちがいつ無茶なんてしたのよ？」
リノの言葉のあとにフィーリア、ソロル、フラウも続く。
「そうですわ。この作戦だって、ユーリ様が世界征服したらなんて素敵なことなのかしらって思っただけですし」
「だな。世界がユーリ殿に跪く姿なんて、ビンビン痺れるぜ！」
「そしてワタシも大活躍できるってことデスね！　う～ん腕が鳴りマス！」
やっぱり彼女たちは普通の少女じゃないな。
でもいつだって勇気をくれる。
「ユーリ様、ゼルドナを奪うことにもう一つ利点がありますわ」
「え？　それはなんだいフィーリア」

「ゼルドナの奥にはパスリエーダ法王国があります。ユーリ様がゼルドナを管理していれば、魔の者もおいそれとは法王国に手を出せないでしょう」
おお、フィーリアが初めてまともなこと言った!?
確かにその通りだ。僕がゼルドナを持っていれば、法王国を守る壁になれる。
ゼルドナの周りには、西にパスリエーダ法王国、東にアマトーレ国、北西にディフェーザ国、そして北東にはシャルフ王の治めるフリーデン国がある。
ゼルドナはこの全方位にケンカを売っていたので、大変迷惑な国だった。
これらの国の位置関係からして、アマトーレのさらに東にあるエーアスト魔王軍が法王国を攻めようと思ったら、ゼルドナを通るのが最短だ。
つまりゼルドナは法王国を守る拠点となり得る。
それを考えても、次の魔が降臨する前にゼルドナを管理していたほうが都合がいい。
「あとねユーリ、他国は魔に汚染されたエーアストのことを信じちゃってるから、このままだと何も知らないまま敵に利用されちゃうかもしれない。場合によっては、他国を人質みたいに使われたりするかもよ？　それを防ぐためにも、ユーリが獲っておいたほうがいいよ」
なんだ？　リノまでまともなこと言い始めた!?
ひょっとして、この子たちって本当は頭がいいんじゃ……？
「そうだユーリ殿、他国に自由に動かれては、むしろ敵の思うつぼだ」

「ソウデス、どうせワタシたちの言うことなんて聞いてくれないのデスから、いっそ世界征服しちゃいましょー！」
おおお、なんか僕、上手いこと説得されちゃったぞ。
確かにみんなの言う通りで、他国に勝手に動かれては、ヴァクラースたちが喜ぶだけ。
そういえば『ナンバーズ』のフォルスさんも、単純な正義では解決できないこともあるって言っていた。
ずっと後手に回りっぱなしだったんだ。こちらからもどんどん手を打っていかなきゃ。
僕が勢力を拡大することによって、他国も耳を傾けてくれるかもしれないし。
理想だけでは上手くはいかない。
みんなの言う通り、世界を本気で守ろうと思ったら、強引なことも考えなくちゃだめか。
世界征服は最終手段としても、力を持っておくに越したことはない。
僕の力で他国を併合し、その連合軍でエーアスト包囲網を作る。
外堀を埋めてからヴァクラースたちと決戦をするのが、一番被害が少ないってことだ。
「よし、決まった！　これから国盗り合戦の幕開けだっ！」
「やったー、ユーリが世界を支配しちゃうぅぅ！」
「上手くノッてくれましたわ♪」
「ご主人様って意外に単純デスよね」

「ね、ユーリは雰囲気に流されやすいって言ったでしょ」
「ああ、さすが勇者、いい作戦だったぜ！」
……え？

2．ゼルドナの王

「ぶわっかもーん！　おめおめと逃げ帰りおって、何をやっておる！　それでも我が国の第一騎士団か！」
贅を尽くした絢爛豪華な一室に、甲高い耳障りな声が響き渡る。
声の主はゼルドナ国王コンスター・デスポート。
その王の間に、先日ユーリによって手酷い目に遭った騎士団長が報告に訪れた。そして、任務失敗の叱責を受けたところだ。
コンスターは薄毛が目立ち始めた頭といい、無駄肉をだぶつかせた腹といい、その容姿の醜さには定評がある。
その上、玉座に腰掛けると足が地に届かないほどのチビだ。

臣下に配慮がある王なら、外見の悪さなど些末な問題だろうが、この男は下の者に対する慈悲など微塵も持ち合わせてはいなかった。
思いやりの感情というモノが欠如しているのだ。
そんな男でも、世襲制の独裁者なら、我がもの顔でなんでも手にすることができる。
世の中はまったくもって不平等である。
騎士団長は必死の形相で弁明する。
「いえ陛下、本当なのです。あそこには本当に魔王がいるのです！　魔王は陛下のことを許さないと言っておりました。すぐにでも謝罪の貢ぎものをあそこに送るべきです！」
「なぁにが魔王じゃ、そんなヤツ、少しも怖くないわい！　もういい、お前は第一騎士団長クビじゃ！」
「陛下、一刻も早く魔王の怒りを鎮めないと、我がゼルドナ国に危険が……」
「おい、こやつを牢に入れておけ」
「はっ！」
「へ、陛下〜っ！」
コンスターは忠告にまるで耳を貸さず、騎士団長を牢獄送りにした。
――まったく、何が魔王じゃ！　役立たずめ！
――どいつもこいつも、こんな簡単な任務で何度も手間を掛けさせおってからに！

コンスターは玉座に座りながら、配下のふがいなさに歯噛みをする。
騎士たちを向かわせた場所には、山賊のお宝が山ほど眠っている。
それは以前から分かっていたが、何やらとんでもないボス――最強冒険者である『ナンバーズ』のボルゴスがいるので、容易には手が出せなかった。
それが、いつの間にかボスは死に、そこに流れ者が住み着いたという噂を耳にした。
なんでも、そいつは復活した魔王と自称しているという。
コンスターは、その情報を信じていなかった。
あんな平凡な場所などに魔王がいるわけがない。魔王が復活するというなら、それなりの場所を選ぶだろう。
それに、流れ者の正体は単なる小僧という話だ。そんなヤツ相手に二回も失敗するとは……
鎮火しつつあった怒りの炎が、また沸々とコンスターの全身を炙っていく。
「陛下、先日お話しした王都民の代表たちが来ましたが、いかがなさいますか」
どうしてやろうかとコンスターが次の手を思案していると、兵士が部屋に現れて報せを告げた。
そういえば、王都民として何やら上申したいことがあるという話だった。
何度も要請してくるから、仕方なく謁見の許可を出したことを思い出す。
――まったく面倒な奴らめ。
煩わしいことが重なり、苛立ちを覚えつつもコンスターは答える。

「ふむ、会ってやるから連れてこい」
「承知しました」
しばしののち、兵士はゼルドナの王都民五人と、それに付き従う屈強な男たち五人を王の間へと案内した。
屈強な男は恐らく、護衛を請け負った冒険者だろう。よってそれなりに腕は立つだろうが、謁見に際して武器は取り上げられている。
「陛下、お目通りを許可していただいたこと、感謝いたします」
「おぬしら、わしに何やら言いたいことがあるらしいな。遠慮せずなんでも申してみよ」
「はっ、では恐れながら。今年の作物は輪をかけて不作でありまして、国民は皆生活に窮しております。陛下にその現状を知っていただきたく、具申しに参った次第です」
「わしにどうせよと？」
「今年の税金と、農家から徴収する作物を減らしていただきたいのです。でないと、我らはもう食べていけません」
ゼルドナ国民は重税によって、日々貧困にあえいでいた。
その上、今年は作物の育ちが悪く、食料危機にも瀕していた。
どうにもならない状況に、王都民の代表が意を決して負担の軽減を懇願しに来たのだった。
「ふむ、分かった。おぬしたちが食うに困らぬようしてやろう」

「ほ、本当ですか⁉」
「ありがとうございます陛下！」
コンスターは喜びの声を上げる王都民の代表を一瞥したあと、そばにいた兵士に命じる。
「おい、こいつら全員牢にぶちこんでおけ。一族も残さず皆捕らえるのじゃ。見せしめに国民の前で処刑してやる」
具申しに来た彼らにほんの一瞬芽生えた希望を、コンスターは無惨にも踏みにじった。
「そ、そんなっ、待ってください陛下っ！」
「ええい、話すことはもうない。はようこやつらを捕まえろ」
命令を受けた兵士たちが嘆願に来た者たちを取り押さえようとする。
そのとき、後ろに控えていた冒険者五人が瞬時に前に出て、兵士たちを拳で殴って気絶させた。
その手際はまさに一流のものだった。
「まったく、聞きしに勝る暴君だな。これほど聞く耳を持たないとは……」
「オレたちゃ全員拳闘士だ。だから武器なんて必要ねえ！　ここに来るまでに取り上げられた武具はダミーさ」
「冷酷非情なその振る舞い、とても王の器とは思えんな。国民の怒りをその身に受けるがいい！」
冒険者たちはゼルドナ国民ではなく、他国からやってきた者たちだった。
正義感の強い男たちは、困窮しているゼルドナ民を救うため、今回の歎願に協力することにした。

万が一のための護衛としてだけでなく、もし国民をないがしろにするような対応をしたら、強硬手段に出る。そう決心していた。
そしてやはり交渉は決裂し、命を懸ける展開に。
兵士の数があまりにも多かったらそれまで。いちかばちかの賭けだったが、警戒心の非常に強いこの独裁者が、何故かこの謁見に際してはロクに護衛を付けていなかった。
まさに千載一遇のチャンス、今なら殺れる！
この男――コンスターさえ仕留めれば、この国を変えることができるはず！
五人の冒険者は、周りの兵士たちを全滅させると、一気にコンスターへと駆け寄った。
「もらったぞ、ゼルドナの愚王っ！」
「数々の悪行はその命で償えっ！」
彼らの必殺の拳がコンスターへと迫る。

ズバシュウウウウウウウッ！

「がはあっ」
だがその攻撃が届く刹那、どこからともなく何者かが突如として現れ、冒険者たちをまとめて蹴散らした。

その乱入者の姿を見て、彼らは驚愕する。
「な……なんだお前は!?　に、人間じゃないのか!?」
「バカな、こんな化け物が王を守ってるってのか!?」
「ま、まさかコイツ……！」
「ヴォルク、やれ」
「グオオオオオオオオオオオオオッ！」
乱入者が咆哮を上げた次の瞬間、冒険者たちは塵となって消滅した……
「ひっ、ひいいいいいっ」
信じられないような惨劇を目の当たりにし、歎願に来た者たちが恐怖で気絶する。
これにて、勇気あるクーデターは失敗に終わったのだった。
「相変わらず見事じゃなヴォルク」
「ふん、この程度なんざ朝飯前だぜ」
コンスターの言葉に対し、ヴォルクと呼ばれた男は粗暴な口調で応える。
「へ、陛下っ、どうかされましたか!?」
「い、今の音はいったい……?」
騒ぎを聞きつけ、コンスターの側近たちがぞろぞろと駆けつけてきた。
「なぁに、身のほど知らずの賊どもを返り討ちにしてやったところじゃ。おい、この倒れているヤツらを牢にぶちこんでおけ。一族郎党も残さず捕まえるのじゃ。わしに逆らった者は皆殺しにしてやる」
「陛下、若い女も殺してしまわれるのですか?」
「ふむ……若い女はもったいないか。見た目が良いのはわしのところに連れてこい。ほかはお前たちが奴隷にするなり好きにしろ」
「承知しました。こやつらの持つ財産はどうなされますか?」
「もちろん全て没収しろ。お前たちにも分け前はやるから安心するがよい」
「はは～、ありがたき幸せ」
彼らは国の重要な役職に就く者たちであり、正義感など存在せず、コンスターのもとで甘い汁を吸っていた。
愚王とその悪臣たちが、ゼルドナを蝕む元凶だった。

――さて、反逆者についてはこれで片付いたが、残っている問題はあの山賊のアジトだ。
コンスターはまた悩みの種について思案する。
どうやら面倒な奴がいるようで、このままただの兵を送り続けても、いたずらに時が過ぎるだけかもしれない。魔王と自称するだけあり、ボルゴスとまではいかないまでも、多少の実力はありそうだ。

その間に誰かに先を越されては、全てがおじゃんだ。
気は進まないが、コンスターは仕方なく奥の手を使うことにした。
「ヴォルクよ、山賊のアジトにおぬしが行って、宝も女も丸ごと強奪してこい！　もはや失敗の報告など聞きとうない。おぬしなら問題なかろう」
「当たり前だ陛下。オレに勝てるヤツなどいない。山賊のボスとやらも、オレに任せればいつでも始末してやったのに」
「いや、正体不明の小僧はともかく、山賊のボスはかなり手強かった。おぬしに万が一があっては困る。おぬしは我が国の宝じゃからな」
「まあ任せとけって。たとえ本物の魔王がいようともオレ様が倒してやるよ」
冒険者たちに化け物と言われた謎の男――それはゼルドナ国将軍ヴォルク・リュコスだった。
獣人の一種である狼人のヴォルクは、基礎能力が通常の人間よりも非常に高い。武器を扱う器用さには欠けるが、その野生味溢(あふ)れる戦闘力は脅威だ。
だが、ヴォルクが強い理由はそれだけではない。
『白銀の狼』という称号を持っており、その力を解放すれば、英雄級ＳＳＳランク冒険者『ナンバーズ』上位に匹敵するほどの強さを出せるのだ。
いま冒険者たちを瞬時に皆殺しにしたのもその力だ。
コンスターは、ヴォルクの力を全面的に信頼していた。他人を一切信用しないこの愚王がだ。

まさに右腕と呼べる存在である。そのため、ヴォルクにだけは特別な待遇をしていた。
そんな虎の子の秘密兵器。ボルゴスならいざしらず、どこぞの小僧などに負けるなんてことはないだろう。
そう軽く考えていると、突然見張りの兵士が部屋に飛び込んできた。
「へ、へ、陛下っ、大変ですっ、魔王が、魔王が我が王都にやってきました！」
「なぁにぃ～？　そんなバカなことがあるか！」
またしても『魔王』絡みの報告を受けたことに、もはや我慢がならぬと怒りが込み上げる。
いったいコイツらは何を目撃してるのか？
「と、とにかく陛下、外を、空を見てください！　とんでもないドラゴンが飛んでいるのです！」
「ドラゴンじゃと？」
そういえば、報告に来た騎士団長が、六十メートルくらいのドラゴンを見たと言っていたのを思い出す。
――アホらしい。そんな巨大なドラゴンなどいるはずがない。
――幻術で騙(だま)されたに違いない。
まったくどいつもこいつも無能ばかりだと、コンスターは心で嘆く。
この愚王は、自分に都合の悪いことは信じない男だった。
役立たずどもの報告に呆れ返りながら、コンスターはバルコニーへと歩み寄り、そこから空を眺

める。

「ほっ、ほんげえええっ!?　な、なんじゃアレはあああっ!?」

そこには見たこともない超巨大ドラゴン――体長六十メートルを超えるゼインが浮かんでいたのだった。

――アレはドラゴンなのか？

――いやドラゴンにしか見えないが、しかしこんな巨大なドラゴンなどいるわけ……

――落ち着け、冷静になれ、コレはきっと幻術じゃ！

コンスターはそう信じ込みたかったが、とても幻術とは思えないような迫力が、そのドラゴンからは感じられた。

「ゼルドナ王よ、我の忠告を無視した報いを受けよ」

「な、なんじゃ？　誰の声じゃ!?」

巨大ドラゴンから、何故か少年のような声が聞こえてきた。

目を凝らしてよく見ると、そのドラゴンの背の上に、黒い衣装を纏った少年がいた。

――まさか、ヤツが報告にあった小僧か？

――本当に、本当に魔王だったというのか？

「陛下～っ、死霊の騎士が……伝説の『白面の死騎士』が城内に入ってきますーっ！」

唖然とするコンスターのもとにまた別の兵士が駆けつけ、顔面蒼白となりながら切迫した状況を報告した。

「『白面の死騎士』じゃと？　そんなもの本当にいるわけ……おげえっ！」

コンスターがバルコニーから身を乗り出し、下を眺めてみると、巨大な死霊馬に乗った騎士たちが十騎ほど、王都を駆け抜けて城内へと侵入したところだった。

そして馬上の騎士の顔には、あるべきモノが何も存在していなかった。

そう、目も鼻も口もない、のっぺらぼうだったのである。

冥界へと誘う白面の死騎士――デスライダーは伝説上の存在だ。それが魔王の部下だという話は聞いたこともない。

しかし今、そうとしか思えない存在が、魔王とともに現れた。

通常の三倍はある体躯の死霊馬には、頭部に二本の角があった。

その巨体を活かした疾走は、もはや馬というよりも小型ドラゴンの突進だ。

馬上の騎士は二メートルを超える巨人で、これまた二メートルにもなる大剣を片手で軽々と振り回している。

兵士たちは恐れおののきながらも、必死に弓や槍で『白面の死騎士』を攻撃する。

魔道士隊も、自身が持つ最大の魔法を惜しみなく『白面の死騎士』へとぶつけている。

だが、『白面の死騎士（デスライダー）』も死霊馬もまるでダメージを受けた様子がなく、兵士の集団を蹴散らし、その怪力で薙（な）ぎ払っていった。
――いにしえより語り継がれてきた死の騎士……アレは人間では倒せぬ死神なのか？
「へ、陛下っ、あちらからは巨大魔獣が来ますっ、アレはひょっとして伝説の幻獣『キャスパルク』ではないでしょうか⁉」
「まだ、まだほかにもおるのか⁉」
兵士の指差す方向をコンスターが見ると、体長十メートルにもなる金色の魔獣が、逃げる兵士たちを追い回していた。
そして全身の毛を逆立たせたかと思うと、辺り一帯に電撃を撃ち放つ。
その姿は、まさに伝説の『キャスパルク』そのものだった。

自分は一度死んで生き返った不死身の男だと、勝手に自負していたコンスター。
怖いもの知らずで生きてきた男にとって、目の前の現実は受け入れがたいことだった。
このままでは、この城が落とされてしまう……
――いいや、まだじゃ！　この王城には超強力な退魔の結界が張ってある。一度たりとも魔の者の侵入を許したことのない、無敵の障壁（バリア）じゃ！　いくら魔王と言えど、そう簡単に城に入れるわけがない。

そう己を鼓舞するコンスターだったが……
「『虚無への回帰（ヴァニタス・エフェクト）』っ！」
ドラゴンに乗った少年が何かをつぶやくと、王城を防御する退魔の結界が全て霧散した。
「しょんな、しょんなはずあるわけ……」
「今から我はそこへ行く。愚王よ、心して待つがよい」
我がもの顔で振る舞ってきた独裁者に、かつてない恐怖が襲いかかる。
怯（おび）えるコンスターなど意にも介さず、少年はドラゴンの背から飛び降りると、歩いて王宮内へと侵入する。
「ヴォルク、ヴォルクーっ！　た、頼む、ヤツを、あの魔王を倒してくれえっ」
「ちっ、マジで魔王だったんか？　やっかいだが、この王宮内で戦うならオレにも勝機はあるぜ」
謎の少年を迎え撃つべく、ヴォルクは足早に移動した。

3．魔王になりきってみる

「よし、今日は魔王らしい演技をしなくちゃな。ガッツリ脅せば相手も抵抗する気なくなるだろうし、戦闘も早めに終わるだろう」

ゼインの背に乗って移動しながら、魔王のイメージを反芻する。
ゼルドナには、本物の魔王のフリをして乗り込もうと思っているからだ。
今回の戦闘は僕一人で行くことにした。
リノたちを連れていると舐められそうだからね。もちろん、彼女たちに万が一があっても困るし。
頑張って魔王らしいところを見せてやるぞ。
「ンガーオ！」
「そうだ、ルクも一緒だったね」
ルクが来たがったので一応連れてきた。伝説の『キャスパルク』は、魔王の威厳を見せるのに充分な存在だし。
もちろん、ルクには手加減するようにお願いしてある。
また、魔王のフリをするに当たって、僕の衣装もそれっぽい感じになっている。
それっぽいといっても魔王なんか誰も見たことないので、おとぎ話に出てくるような格好に雰囲気を合わせてるだけだが。
衣装はリノたちがわいわいと楽しく作ってくれた。
どうすれば邪悪な感じになるかとか、魔王に相応しい雰囲気が出せるかとか、みんなノリノリだったようだ。
世界を相手に戦うかもしれないのに、危機感ないというか……まあ楽しそうで何よりだけど。

僕の外見が魔王っぽく見えるかはともかく、ゼインがいるのは本当に大きい。
僕だけでは、そう簡単には恐怖を与えることはできないだろう。
だけどこんな巨大なドラゴンで乗り込めば、否が応でも魔王の存在を信じる気になるはず。
ゼインが仲間になってくれて本当によかった。
今回色々とちょっかいを出されたが、諸悪の根源はゼルドナ王で、無理矢理命令されてる兵士も多いはずだ。
善良な人は傷つけたくないし、被害は最小限に抑えたい。
こうやって脅しを重視してるのは、魔王の恐ろしさをこれでもかと見せつけ、逆らうのは無駄と思わせたほうが、相手の諦めも早いだろうという目算からだ。
あとは、『神遺魔法』の『分身体』で僕のコピーを十体作り、そいつらにも戦わせる予定だ。
ハッタリを利かせるため、分身体の体格は最大限に大きくし、顔はのっぺらぼうにした。
僕と同じ顔が十人もいるとさすがにおかしいからね。
分身体はベースレベル９９９の僕と同じステータスなので、かなり強い。
僕の持つスキルや魔法まではコピーできないが、素のステータスだけでもＳＳＳランク冒険者くらいには戦えるはずだ。
何せレベル９９９なので、ＨＰがべらぼうに高い。
耐久スキルがなくても充分化け物クラスで、余程のことがない限り、まずＨＰは尽きないだろう。

その分身体に、『魔道具作製』レベル10で強化した装備を着けさせるので、あの『ナンバーズ』のボルゴスくらいは強いかもしれない。
分身体には状態異常攻撃は効かないし、ダメージを受けても怯まないし、怪力で巨体な上にＨＰも山ほどあるしで、相手にとってはかなり恐ろしい存在だ。
結構怖がってくれると思っている。
この分身体たちを、最強の死霊馬『蹂躙せし双角獣』に乗せて騎兵隊を作った。
『蹂躙せし双角獣』は『死霊魔法』レベル10じゃないと召喚できないので、まず喚び出せる人はいないだろうし、普通は見たことすらないはずだ。
『蹂躙せし双角獣』は近付くだけで相手を『精神破壊』しちゃうんだけど、それでは多くの怪我人が出そうなので、今回はその能力は封印することに。
それでも、この死霊馬はドラゴン並みの体力があるので、まあそこらの兵士が何人集まっても殺せないだろう。
ゼルドナ王都に近付いたところで突撃準備を整え、この最強の騎兵隊を引き連れながら、僕たちは王都内へ突入した。

戦闘が始まると、兵士たちが『デスライダー』とか言いながら騒ぎ始めた。
どうやらたまたま作ったこの騎兵隊が、『デスライダー』というのに似てるらしい。

多分ゼルドナに伝わる架空の騎士なんだろうけど、おかげで想定以上に怖がってくれてラッキーだ。
ルクも手加減しながら上手に活躍してくれている。
そしてゼインの背中からゼルドナ王に宣戦布告。
王城には悪魔を拒絶する退魔の結界が張られているようだけど、人間の僕には全然関係ない。
ただ、一応魔王という設定で攻めているので、結界はちゃんと壊してあげないとね。
僕は『神遺魔法』にある解除魔法――様々な効果を打ち消す『虚無への回帰』で、結界を全て無効化した。
「今から我はそこへ行く。愚王よ、心して待つがよい」
そう宣言した後、ゼインの背から飛び降り、ゼルドナ王がいる王宮の正面から中へと入る。
一階には謁見の間とかあるみたいだけど、さっきゼルドナ王は三階から顔を出してたな。
恐らく下には降りず、そのまま上の階にいることだろう。
僕は階段を見つけて二階に上がっていく。
独裁者で敵の多かったゼルドナ王だけに、王宮内の防犯対策にはかなり力を入れていたようだ。
あちこちに侵入者撃退用の罠が仕掛けてあるけど、もちろん僕には通用しない。
そのまま無人の野を歩くが如く、全ての罠を破壊して三階へと向かう。
三階へ上がると、あとは王様の部屋まで一直線だけど、その通路の途中に怪しげな一角が。

まあ分かりやすい罠だ。『領域支配』スキルで、隠れているヤツの殺気もガッツリと感知してるし。
回り道を探すのも面倒だし、そのまま罠に直行してみる。
そういえば、ゼルドナには名高い将軍がいたっけ。確か獣人で、負け知らずってほど強かったはず。
かなり残虐な性格で、あちこちの戦いで容赦なく敵を殺してるとか。
待ち受けてるのは多分その人だな。
特に気にすることもなく、僕は無防備に通路を歩いていく。
予想通り、怪しい区画に差し掛かったとたん、後ろに鋼の棒が下りて僕の退路を断った。
そして、前からは獣人らしき男――身長百八十センチを超える屈強な体格の狼人が現れる。
ちなみに、獣人の見た目は普通の人間とほぼ変わらないが、頭部の獣耳と手首足首あたりの毛がフサフサしていることで見分けがつく。
「クックックッ、よく来た魔王よ。オレは人類最強のヴォルクだ。せっかく復活したようだが、このオレが魔界へ叩き帰してやる。いや、行くのは地獄かな？」
やはりその将軍か。
解析してみると、なるほど強い。全体的なポテンシャルの高さに加え、当然のように『称号』まで持っている。

その名は『白銀の狼』。
『ナンバーズ』のボルゴスやフォルスさんと同じSSランク称号だ。
能力を解放すると野獣化（ビーストモード）となって、大幅に戦闘力が上がるらしい。
「このエリアでは魔法は全て使えない。つまり、オレとの肉弾戦だ。いくら魔王とて、この狭い空間ならオレには勝てんぞ」
あっ、ホントだ！　いつの間にか魔法封鎖結界が発動してた。
人間の結界にしては規格外なほど、かなり強い魔力を感じる。多分、増幅装置を使った強化結界だろう。
対象エリアも極力絞って、その分高出力になっている感じだ。
ただ、封じているのは『属性魔法』や『光・闇魔法』、『神聖魔法』などの通常魔法で、上位の『界域魔法』とかは問題なく使えるようだ。
まあ知らないんだろうな。
ここは通路の幅七メートル、前後の奥行きが十五メートルほど。
この狭い場所なら自信ありってことか。
いいだろう。せっかくだから、『呪王の死睨（しげい）』も魔法も使わずに付き合ってやる。
「行くぞ魔王っ！　時代遅（ロートル）れはもはや用なしだ。尻尾を巻いて地の底へと帰るがいい！　満ちよ月

光、獣王進化！」
ゼルドナが誇る将軍――獣人ヴォルクが『白銀の狼』の能力を発動する。
すると、灰色の体毛が一気に伸びて、そして全身の骨格もゴリゴリと音が聞こえてきそうなほど大きく変形し始めた。
基本的に獣人は体毛が濃いが、それはあくまで一般的な人間と比較してであって、本物の獣のように全身が毛に覆われているわけではない。
顔も、獣耳を除けば普通の人間と同じだ。
それが、ヴォルクが力を解放したとたん、まるで本物の魔獣のように全身が体毛で覆われ、筋肉も魔獣のそれに変化し、そして顔もヘルハウンドのようにアゴを突き出した獣顔になった。
これは……『人狼』だ！
すでに絶滅したと言われる魔族で、最強魔族『吸血鬼』と並ぶほどの力を持っていたという。
その能力が、『称号』として受け継がれていたんだ！
伸びた体毛は見るからに硬質なモノへと変化し、ギラギラと銀色に輝き出す。
なるほど、ヴォルクが自信に溢れているのも分かる。
『人狼』や『吸血鬼』は、人間を遙かに超えた存在だ。常人では到底敵うような相手じゃない。

立ち読みサンプル
はここまで

変身が完了したヴォルクには、すでに人間だった面影はなかった。
「では魔王よ、戦闘開始だ！」
ヴォルクはそう宣言したあと、ほんの少し屈んだかと思えば、一瞬で間合いを詰めてその両手の爪で攻撃してきた。
人狼になったヴォルクは、全身が筋肉の塊みたいなモノだ。
通常の人間では考えられないような動きで攻撃を仕掛けてくる。
だが僕は、相手の少し先の行動が見える『超越者の目』を持っている。
この程度では僕の虚を衝くことはできない。
「やるな魔王！　しかし、これは避けられるかな？」
ヴォルクの姿が、一瞬視界から消えた。
それは上下左右の壁を使って、立体的に攻撃をしてきたからだ。
コレは凄い！
壁に飛んだかと思えば、天に着いたり地を蹴ったりと、戦闘のセオリーでは考えられない動きをしている。
その常識外の動きに、さすがの僕も少し面食らった。
この狭い空間はヤツの巣穴だ。
ここなら魔王に勝てると言ったのも、あながちウソではなかった。